

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2024年(令和6年)
11月5日 第738号

PDF版

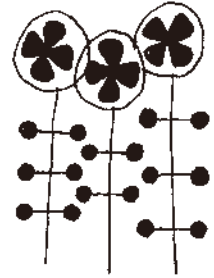
国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2024年7月20日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

田中慶子 著

「不登校の女子高生が日本トップクラスの
同時通訳者になれた理由」をお聞きして

関根 茉莉花



その人は語りかけるように話し始めた。スライド画面ではなく集まった人々に向き合う、まさに図書室の「つどい」だ。

親しみやすい口調にも関わらず、実は、ビル・ゲイツ、ダライ・ラマ、皇室の方々ほか世界で活躍する超一流の人の同時通訳を務める人物が今回の著者田中慶子さんだ。英語関連に加え、取り組まれているコーチングのことや、今現在考えていることなども交え、明瞭な発声で本の内容に絡めてお話をくださった。通訳という音を扱う職業のせい、お声の聞きやすさ、心地よさが印象深かった。幼少期から高校までの集団行動や学校への違和感から不登校までの経緯、その後紆余曲折を経てアメリカに留学、そこで初めて学びの楽しさに目覚めて通訳者になるまでのお話。その中で、深く感銘を受けたのが、田中さん自身が日本の外に出て気付いたという無意識の思い込みや、育った国や地域の価値観に縛られた感じる必要のない罪悪感、という部分だ。誰にでも思い当たる普遍性と、不登校というテーマの根本的な問題について考えさせられるお話だった。

ご自身が通った日本の厳しい校風の高校での勉強は、受験マシーン育成のようで嫌いだっただが、アメリカの学びの手法では、学ぶことが楽しいと思えるようになったというお話から、人は環境によって生きやすさや学ぶ意欲までも変わるのだな、と再認識した。ふと、自身が小学生の時に出会った「南極ではうまくやれない人もアフリカでならやっていける」という某作品の人物のセリフを思い出した。価値観・制度を含め場所が変わることで正反対の人生を歩む道を拓いた人がいたと、お話を聞きながら周囲・環境の個人への影響について思いを馳せた。

ここが駄目ならあっち、あっちでも駄目ならもっと違うところ、と世界の広さ、視野の広さの重要性が伝わる田中さんの体験は、是非、学校と家がほぼ生活の全ての、その中でも困難を感じている子ども達にも共有したい話だった。今いる環境が世界の全てではないのだと。

また、英語との関わりについて、アメリカの大学で英語が母語の学生と同じ扱いで容赦なく成績評価されたというエピソードが、英語学習をする上で大変参考になった。田中さんは、言葉というハンディキャップがあるなら事前にその授業で扱う範囲を学んでから授業に臨むという方法をとっていらした。母語話者ならサツとできる課題を、何倍、時には何十倍もの時間をかけて授業を受けたそうだ。この学習体験は、同時通訳の仕事にもつながっているとのこと、今も通訳の仕事の事前準備には時間をできる限りかけ現場に向かっていると聞いた時は、超一流通訳者の影には膨大な準備ありと感心した。プロがそこまでしてやっていると現場で最高のパフォーマンスを行えるのだと。これぞ、況や素人をや、の状況だ。つべこべ弱音を吐いている場合ではない、労せず上達するなんてあり得ない、と英語学習者として励まされた。

最近では語学もAIや翻訳ツール等の技術発展もあり、自分で勉強するよりも技術に頼る方が楽だなと学びについて弱気になっていたが、技術も上手に取り入れつつ、やはり自身の力でも頑張ろうと強く思った。自分の努力や経験、知識の蓄積は誰にも奪えない大事なものと気づかせていただき、気持ちも軽く会場をあとにした。

最後に、田中さんの次著『新しい英語の教室―同時通訳者が教える本当に使える英語術』(インプレス)も一読をお薦めする。英語は怖くない!という事が、田中さんの一番伝えたいことだろう。

ブッククラブから

太宰治著『ヴィヨンの妻』雑感

武内 法行のりゆき

この作者を私は余り好きでなかった。自分の弱さや放蕩生活売り物にしている小説家、との印象があつたからである。従つて、これ迄彼の作品はほとんど読んでいない。

しかし、今回、ブッククラブの課題図書ということで『ヴィヨンの妻』全篇を通読してみ、印象が変わった。

酒や女に溺れる崩れた生活であつても、作品自体は作家の眼が行き届き、表現の確かさと魂を感じたからである。そして、この八篇の作品が、敗戦後彼が入水自殺する迄の三年足らずに書かれたことを知ると、よくぞあの、日本中が飢餓に喘いでいた時代に他の長編も併せて書いたものだ、その点でも見直す思いであつた。

更に又、この頃の太宰は人気作家であつた。実家の津島家を勘当される程の生活破綻者であつても、ひとかどの作家として認められていた。それが何故、戦争未亡人と「情死」したのだろうか？

乱世ではあつたし、酒色や麻薬の影響か、或いは彼固有の自殺願望癖か、私には到底理解出来ぬことである。が、今もなお愛読者は多い。ファンにとつて、そのオラは特別のものらしい。それは何であろうか？

よく掴めぬまま、この作家について知るべく講座に参加したのだつた。

解説をされた講師の尾崎名津子先生（立教大学）は、先ずどの作品も一人称の語りであり、中でも女性の独白体が二篇あることに触れ、太宰の作家デビューから自死

までの成長過程を、初、中、後の三期に分けて解説された。『ヴィヨンの妻』は、戦後の、この三期目に当たり、心中への傾斜の作品集の由。

初期では、女子向けの投稿文藝雑誌で審査員川端康成に注目され、特に中期での『女生徒』（ある女性の日記に基づく）は、彼に激賞されたそうである。

竹久夢二もそうであろうが、大正ロマンから昭和モダンへの風潮の中で、女子の心を掴む自己の資質と表現の才を、磨いていたのであろう。作品にある種の「花」があるのである。女性の独白体小説をつくる術もここで作ったようだ。

ところで、この当時、世の中は今よりもっと男社会だった筈である。家庭では男が家長として、妻子を養う責任を担っていた。しかるに、その家長が責任を放棄し、金の不始末までしたらどうなるか？たちまち妻子は窮地に陥るであろう。その有様が、『ヴィヨンの妻』に書かれている。

太宰は、文才だけの人であり、男社会の現実で生きられぬ生活無能力者であつた。その才に惚れこむ女性の中でのみ生きられる質の男であつたようだ。愛人ならともかく、子供をかかえた妻は大変苦労したと思われる。

しかし、ヴィヨンの妻は、それにめげぬ逞しさを持つた女性として描かれる。男にひどいめに遭いながらも乗り越えてゆく明るさがある。事実はどうか分らぬが、そこに救いがあるようだ。

また同時期の『おさん』も、実際の心中を予告するような作であるが、妻は「駄目な人」と、夫を断罪し、自分は現実を生きる意志を示す結末になっている。それは、虚実が混同したまま死に向かう作者からのメッセージでもあるだろうか。

さて今回初めて知つたが、津軽では、太宰は名家「津島家の面汚し」、「郷土の恥」とて、今も余り受け入れられていないという。こうして故郷喪失者の彼は、東京で「死に花」ともいふべき作品を多く咲かせ、愛人と心中したのだつた。

太宰の死から七十六年、今なおファンが絶えないのは、破天荒な人生と死に様にも関らず、「花のある」文学の人であることを、読者が感じるからではないか、と今では思う。



くにたちブッククラブ

ーたしかにそこにいた「わたし」のことー

河林満『渇水』
(角川文庫)

講師 佐藤 泉
(青山学院大学・日本近代文学)

とき 11月14日（木）
夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室
申込先 公民館 ☎042(572)5141
またはホームページより申込

*次回は12月12日（木）
滝口悠生『高架線』
(講談社文庫)です。

*ブッククラブ HP ▶



(新潮文庫)

新着図書から

《総記》

街の書店が消えてゆく 月刊『創』編集部編 (創出版) 070
ジャーナリストの条件 ビル・コバッチ (新潮社) 024

《歴史》

沖繩戦を知る事典 古賀徳子編 (吉川弘文館) 219
シュペーア マーティン・キッチン (白水社) 289
生きつづけるホロコーストの記憶を問う ルート・クリューガー (みずす書房) 289

詩人教師・近藤益雄その生涯 清水寛 (新日本出版社) 289
辺縁の自由人 李永熾 (三元社) 289

《社会科学》

パレスチナ／イスラエルの《いま》を知るための 24 章 鈴木啓之編著 (明石書店) 302
ロシア極東・シベリアを知るための 70 章 服部倫卓 (明石書店) 302

エルサルバドルを知るための 66 章 細野昭雄 (明石書店) 302
町内会 玉野和志 (筑摩書房) 318

地域居住とまちづくり 中山徹編 (自治体研究社) 318
14 歳からの非戦入門 伊勢崎賢治 (ビジネス社) 319
ガザ日記 アーティフ・アブー・サイフ (地平社) 319

選択的夫婦別姓 寺原真希子 (岩波書店) 324
森と算盤 渋沢寿一 (大和書房) 332
仕事と人間下 ヤン・ルカセン (NHK 出版) 366

女性はずな男性より貧しいのか? アナベル・ウィリアムズ (晶文社) 367
テヘランのすてきな女 金井真紀 (晶文社) 367

「時代」を切り拓いた女性たち 原野城治 (花伝社) 367
マチズモの人類史 イヴァン・ジャブロンカ (明石書店) 367

わたしは 13 歳今日、売られる。 長谷川まり子 (合同出版) 368
知的障害のある成人男性の性的欲求と支援 石黒慶太 (明石書店) 369
「障害者」は私たちにとって「やつかいもの」なのか 野村恭代 (東信堂) 369

NPO とは何か 宮垣元 (中央公論新社) 369
令和型不登校対応マップ 千葉孝司 (明治図書出版) 371

フランス人記者、日本の学校に驚く 西村カリン (大和書房) 372
男子校の性教育 2.0 おおたとしまさ (中央公論新社) 375
異界にふれるニッポンの祭り紀行 大石始 (産業編集センター) 386

《自然科学》

ヒトは嗜癖する 共依存から性暴力まで 斎藤学 (金剛出版) 493
あらゆることは今起こる 柴崎友香 (医学書院) 493
中高年の発達障害 風野悠久 (現代書館) 493

《工業》

連帯の政治社会学 3. 11 後の反原発運動と市民社会 ベアタ・ボホロディッチ (明石書店) 543

《芸術》

軽量登山入門 栗山祐哉 (Gakken) 786
《文学》 土岐善麿の百首 河路由佳 (ふらんす堂) 911
あじろ 赤松利市 (双葉社) 911

ノイエ・ハイマート 池澤夏樹 (新潮社) 911
今日も明日も負け犬。 小田実里 (幻冬舎) 911
国道沿いで、だいたいようぶ 100 回 岸田奈美 (小学館) 911

オパールのはたき 桐野夏生 (中央公論新社) 911
うらはぐさ風土記 中島京子 (集英社) 911
転がる珠玉のように プレイデイみかこ (中央公論新社) 911

南光 朱和之 (春秋社) 921
別れを告げない ハン・ガン (白水社) 921

カズオ・イシグロを求めて 武富利亜 (長崎文献社) 930

《一節》

横井敏郎 編著

『子ども・若者の居場所と貧困支援』



貧困がもたらす不利は低学力・低学歴だけではない。それは、不十分な衣食住、適切なケアの欠如、文化的資源の不足、低い自己評価、不安感・不自信、孤立・排除など生活の様々な局面で複合的に現れ、年齢とともに累積されることで人生の選択肢を狭めていく。このことを念頭に置くならば、狭義の「学習支援」に留まらず、それを越えたところにこそ、子どもへの貧困対策に資する学習支援の可能性が見出されるべきではないだろうか。

これまでも学習支援の学習以外の側面にも関心が向けられてきた。全国の実態調査からは、実施割合の高い順に、「保護者に対する支援」(46・6%)、「修了式・お別れ会」(44・3%)、「食事の提供」(39・8%)、「面接練習」(38・1%)が並んでいる。多くの先行研究や事例報告では、学習だけではなく居場所の意義が強調され、それゆえに、これらの両立の困難さや構造的なジレンマが指摘されている。こうした様々な要素を併せもつ学習支援が、1つの事例の中でどのように実践されているかという全体像を検討することは、学習支援のあり方を展望する上でも有益と考えられる。(学事出版)

講座詳細は公民館だより 11 月号をご覧ください

中学生のための学習支援「LABO☆くにスタ」



公民館では市内の中高生を対象に、大学生たちと一緒に勉強する学習支援事業「LABO☆くにスタ」を開催しています。

ここでは、教えて欲しい教科や、わからない宿題を大学生がサポートします。「勉強のわからないところを聞きたい」「1人で勉強するより誰かと勉強したい」「大学生と話してみたい」……そんな中高生の居場所です。

勉強をしてくれる大学生も募集しています。お気軽にお問合せください。

\\ 子どもの居場所について考えてみませんか？ //

講座参考図書

- *子どものための居場所論 阿比留久美 (かもがわ出版)
- *教育と福祉の出会うところ—子ども・若者としあわせをひらく 竹内常一 佐藤洋作 編著 (山吹書店)
- *子ども・若者の居場所と貧困支援 横井敏郎 (学事出版)
- *「無料塾」という生き方—教えているのは、希望 小宮位之 (ソシム)
- *移民の子どもに隣に座る—大阪・ミナミの「教室」から 玉置太郎 (朝日新聞出版)
- *つながり続ける子ども食堂 湯浅誠 (中央公論新社)

〈私の本棚から 第2回〉

西田治文著・塚腰実監修

『植物化石』

—5億年の記憶—

黒川 祐子



11月、本格的な冬の訪れを控えたひとときの穏やかな季節。イチヨウの黄葉がきれいです。イチヨウは中生代から生きている化石と言われています。「化石」と聞いて思い浮かぶのは恐竜？アンモナイト？「ジュラシックパーク」の琥珀の中の蚊？それとも石炭や石油でしょうか？私は中学生の頃に見た葉っぱの化石が印象的でした。あんなに薄っぺらいものが何百万年も残るなんて（圧縮化石というのだそうです）。

『植物化石—5億年の記憶』にもレースのように繊細な葉脈の圧縮化石、鈣化してオパールのように輝く幹の欠片の化石が掲載されていますが、全体的に地味—な本です。

しかし、この地味な化石たちによって地球のたどってきた歴史が語られていきます。25億年前のシアノバクテリアの爆発的増加による酸素の増加、オゾン層の形成が陸上生物の出現を促しました。石炭紀の巨大トンボが飛ぶロボク（ツクシの祖先）リンボク、フウインボクの最大40mにもなる大森林がやがて石炭となり（後世の私達の社会を1000年以上支え）、ペルム紀—三畳紀に大繁栄した裸子植物グロソプテリスの化石がゴンドワナ大陸の存在を証明します。ジュラ紀にはソテツ、イチヨウの仲間、スギ、ヒノキの仲間が恐竜に食べられないように？硬

い球果（松ぼっくり）をつくり、白亜紀には被子植物が登場。古第三紀の小さな花の化石はいったい何色だったのでしょうか。地味な化石から想像がふくまいます。

イチヨウ同様、生きている化石と言われているメタセコイアですが、日本の古植物学者の三木茂が別々の植物の化石とされていた球果と小枝が同一植物のものであることを突きとめ、発見につながったそうです。その後、中国で見つかった未知の植物が現生のメタセコイア属であるとわかり、現在、新宿御苑などでは日本各地の公園にも植えられています。多摩地域にもメタセコイア属が高く伸びた公園や並木があります。小春日和に生きている化石を眺めて、地球のたどってきた長い道のりに思いを馳せるのはいかがでしょうか？（INAX出版）

この本と一緒に読んだのは、『化石に眠るDNA』（更科功 中公新書）…琥珀の中の吸血液からDNAを取り出し、恐竜を復活させるのは難しそうです。

『地球全史 写真が語る46億年の奇跡』（白尾元理写真・清川昌一解説 岩波書店）

〈アンケートのおねがい〉 今年印象に残った 本は何ですか？



図書室月報では、毎年1月号で「今年印象に残った本」の特集をしています。ぜひご協力をおねがいします。しめきりは、12月8日（日）です。くわしくは、図書カウンターまでどうぞ。